

氏 名 窪田 暁

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1736 号

学位授与の日付 平成27年3月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 比較文化学専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 「野球移民」を生まだす人びと—ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究—

論文審査委員 主 査 准教授 鈴木 紀  
教授 岸上 伸啓  
准教授 南 真木人  
名誉教授 杉本 尚次 国立民族学博物館  
准教授 高畑 幸 静岡県立大学

論文内容の要旨

Summary of thesis contents

本研究の目的は、ドミニカ共和国（以下、ドミニカ）からアメリカに渡る野球選手（「野球移民」）の存在に注目し、彼らの移住経験をとおして浮かびあがるドミニカの人びとの生活世界を、「野球移民」と送り出し社会の人びとの相互交渉に着目して明らかにすることである。1990年代以降、欧米のプロ・スポーツ界を中心にアフリカ、中南米出身の外国人選手の活躍が目立つようになった。この「スポーツ移民」とよばれる人びとが誕生する背景には、急速に拡大するグローバル化の影響があり、プロ・スポーツ界も安価な人材を発展途上国に求めはじめたからである。しかしながら、これまで、彼らを送りだす社会の側に軸足をおいて、「スポーツ移民」の発生要因を出身社会の文化との関わりから検討されることはなかった。従来の研究では、「スポーツ移民」が誕生する社会の人びとの生活世界を詳細に検討することなく、経済的指標によって移民送り出し社会を貧困と設定することで、豊かな「北」と貧しい「南」という二分法の枠組みのなかで発生要因を説明することに終始する傾向があった。

ドミニカ野球の研究においても、プロ・スポーツのグローバル化を世界経済システムの文脈に位置づけ、「中核（アメリカ）」による「周辺（ドミニカ）」の経済と文化の包摂であるという分析がなされてきた。また、近代スポーツをめぐる人類学的研究は、外来のスポーツが当該社会に根づく過程に注目し、それを土着化という用語で一面的に分析するのが主流であった。しかし、いずれの研究も「スポーツ移民」と彼らを送りだす社会の人びとの、伝統的な規範や価値観にもとづく相互交渉については注目してこなかった。こうした問題意識にもとづき、本論文では以下の課題を設定した。ひとつめは、「野球移民」の移住要因を現在の世界経済の諸相に着目して明らかにすること。もうひとつは、野球という近代スポーツとドミニカ社会の親和性に着目し、「野球移民」の発生要因を明らかにすることである。

ドミニカからアメリカに渡る「野球移民」が急増しはじめるのは、1990年代を過ぎてからである。それは、メジャーリーグベースボール（MLB）の各球団がこぞってドミニカに選手発掘・養成施設であるアカデミーを設けるようになった時期と重なる。アカデミーを頂点とした選手のリクルート・システムの整備は、効率的なリクルートを可能にしたが、これは、世界の中核から周辺地域に製造拠点を移してきた製造業の多国籍化と見事に一致する形態である。

その一方で、ドミニカが1965年以降、多くの移民をアメリカに送りだしてきた社会であることも「野球移民」が誕生する要因としてあげられる。初期の移民の多くは、都市部の中間階級が占めていたが、1980年代のドミニカ経済の後退を受け、移民の絶対数が増えるとともに、移民となる人びとの階層や背景は多様化しはじめる。ドミニカに特有の大家族のネットワークが、アメリカに到着したばかりの移民を庇護し、連鎖的に多くの移民を生みだすことに繋がったからである。本論文では、アメリカで暮らす移民が増加し、出身地の人びとの日常生活のなかに移民との関係や送金といったこれまでになかったものが入り込むことで、移民を送りだすバリオ（地域共同体）がアメリカという「中核」に結びつけられていく過程を明らかにした。

本論文では、「野球移民」が発生する要因を考察するにあたり、その前提としてドミニカにおいて、野球がいかにカネを稼ぐ手段として認識されているかに注目した。そこでは、移民からの送金によってなんとか生きのびようとする人びとの生活戦略やバリオ内に格差

(別紙様式 2)  
(Separate Form 2)

が拡大することを回避するような力学が働いていることが明らかになった。その力学とは、基本的にはカネの稼ぎかたをめぐる規範意識にもとづいているが、その規範から外れた者は「妬み」の対象となる。具体的には、ドラッグを売ったカネ、泥棒で手に入れたカネなどは「きたないカネ」とされる一方で、ペロータ（野球）で稼いだカネは「きれいなカネ」として認識されている。

一方、バリオ内には、こうした稼ぎかたをめぐる規範にくわえ、①富の独占を許さない、②たかりは恥である、というふたつの規範が存在する。これらすべての規範から逸脱せずに、より多くの送金を受けとろうとする人びとは、移民を「ドミニカンヨルク（ドミニカン+ニューヨークの造語）」としてステレオタイプにあてはめ、「非日常」という条件のもとで、堂々と「たかってもよい」という規範からの逸脱を許す社会的合意が、バリオ内で暗黙裡に共有されることになった。一方の移民も、「ドミニカンヨルク」に込められている理想像や価値観を内面化して育てているために、国際電話などのやりとりのなかで、その役割を演じるようになり、一時帰国の際には、華美で散財のかぎりを尽くす「ドミニカンヨルク」としてのイメージを裏切らない行動をとっていることが明らかになった。

このような移民とバリオの人びとの相互交渉を規定しているのは、バリオ中にはりめぐらされたクーニャ（パトロネージ）とよばれる垂直的な扶養義務システムのネットワークである。バリオの人びとは、ドミニカに特有の母親中心的な大家族を起点としたクーニャにもとづいて送金を引きだし、一方の移民もクーニャにもとづき送金をしている。さらに「野球移民」とバリオの人びとのあいだの相互交渉に注目すると、「野球移民」がクーニャにもとづき、大家族やバリオの人びとを庇護している実態とともに、ペロータで稼いだ「きれいなカネ」が、「気前よく」わけあたえられることで、「野球移民」に威信が付与されることが明らかになった。つまり、バリオの稼ぎかたをめぐる規範に合致し、地域社会全体を救済できるような職業は、「野球移民」しかみあたらないのだった。

一方、当事者である「野球移民」も、カネを稼ぐ手段としてペロータを認識しているが、それを促したのは、システムとして確立されていたアカデミーであり、そこへ選手を送りこむことを生業とするブスコン（仲介人）の存在だった。また、「野球移民」がバリオ全体に富を分配する際、宗教行事にあわせるかたちでなされている事例からは、「野球移民」がペロータに出会い、大リーガーになれたのはすべて「神の思し召し」だという認識をもっていること、そしてバリオの人びととその恩寵を分かちあおうとしていることが明らかとなった。つまり、「野球移民」は、神の名を借りてバリオ全体に恩返しをする必要があったのである。

こうした議論を裏づけることになったのは、アメリカの移民コミュニティの実態だった。多くのドミニカ移民は、出身地の価値観を移住先にもちこみ生活しているが、それが皮肉にも一時帰国を遠ざけることにつながっている。そして、一時帰国できない彼らが、出身地のバリオに重ねあわせていたのは、ドミニカ本国において文化として根づくようになったペロータだった。このようにペロータをめぐる価値観は移民とともに越境し、移住先においても根づく移民の生きかたを支配し、移住先の生活でも揺らぐことはなく、むしろ強化され、出身地のバリオの代わりという新たな意味づけまで付与されていたのである。

以上みてきたように、「野球移民」の移住経験をとおして浮かびあがってきたドミニカの人びとの生活世界とは、①アカデミーや「ドミニカンヨルク」との相互交渉にみられるトランスナショナルな世界経済とのつながり、②クーニャに裏打ちされたバリオの規範意識や価値観、③バリオの価値観に規定される個人の生き様である。こうした異なる三つの

(別紙様式 2)  
(Separate Form 2)

レベルが相互に関係し、重層的に重なりあうことで、人びとの生活世界が形成されているのだといえよう。

博士論文の審査結果の要旨

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、ドミニカ共和国（以下ドミニカ）からアメリカ合衆国へ野球選手として移住する「野球移民」が、なぜ、いかに生じるかを明らかにするために、野球を軸にドミニカの人々の生活世界を描いた民族誌的研究である。本論文のためのフィールドワークは、2004年12月から2013年1月までの間、計30ヶ月にわたって実施された。主な調査地はドミニカのペラビア県バニ市ロス・バランコネス地区であるが、首都のサントドミンゴ市、アメリカ合衆国のニューヨーク市、ペンシルベニア州、マサチューセッツ州でも情報収集が行われた。

本論文の構成は、序論以下5つの章と結論からなる。序論ではまず、メジャーリーグ・ベースボール（以下MLB）でプレーする外国人選手のうちドミニカ出身者が最多であることが示される。そしてそのような野球選手と故郷ドミニカの人々との相互交渉が本論文の研究対象であることが述べられる。

第1章では先行研究のレビューを行い、本論文の理論的関心が示される。著者は、従来の国際移民研究において、移民発生の要因として南北格差など経済的な問題が主に検討され、移民の出身社会の文化は十分に検討されてこなかったと批判する。またスポーツに関する文化人類学的研究では、外来スポーツの土着化過程や伝統スポーツの変容が論じられてきたものの、特定のスポーツを通して現代世界の特徴を解明するような研究が見当たらないと指摘する。これらの限界を超えるため、著者は野球移民という概念を設定する。これにより野球がドミニカにおいて、いかに独自のペロータ（ドミニカにおける野球の口語的表現）文化を形成し、その文化にドミニカの人々がどのように関わり、野球移民というスポーツに特化した国際移民が生まれるかを、本論文を通して解明したいと述べる。

第2章では野球移民を生み出す現代ドミニカ社会の特徴が調査地の事例から分析される。著者は、人々の間のさまざまな扶助制度を紹介し、特に、別居している父親が母親に対して支払う子どもの養育費に着目する。このような世帯外部からの扶養に、現地語でパトロネージを意味する「クーニャ」という概念を当てはめ、クーニャをドミニカの社会関係の基本的な規範として措定する。そしてクーニャを求める感情は、アメリカ合衆国に移住したドミニカ移民一般にも向けられ、故郷の人々に対して気前よく振る舞う「ドミニカンヨルク（ドミニカ人とニューヨークをあわせた造語）」という移民の理想像が形成されたと指摘する。

第3章では、ドミニカに野球が伝播してから現在にいたるまでの歴史を概観しながら、ドミニカにおいてMLBのリクルート・システムが確立し、それに対応してペロータ文化が生まれた過程がたどられる。中でも筆者は、若手人材を発見、育成するために各球団が設置したアカデミーの存在を重視する。なぜならば、野球少年がそこに参加する際にMLB球団から支払われる高額な契約金を巡って、少年やその家族、ドミニカ人の野球コーチやスカウトなど、さまざまな人々が独自の関心を抱いてペロータとの関わりを深めているからである。こうしてドミニカの人々は、ペロータを、騙しや薬物販売など非合法的取引とは無縁の「きれいなカネ」が稼げ、人生を正しい方向に導くものとして積極的に意味づけるようになったと著者は考える。

第4章では、野球移民が故郷の社会に対して行う富の分配について記述する。著者の調査地出身のMLB選手は、故郷の人々にクリスマス・プレゼントを配ったり、守護聖人の祭りの際にさまざまな催しを後援したりするなど、野球によって得た富を分配することに余念がない。著者は、こうした振る舞いを集落レベルにおけるクーニャの発現と考え、MLB

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

選手と故郷の人々がクーニャの規範を共有している証左だと指摘する。

第 5 章では、アメリカ合衆国在住の一般のドミニカ人移民（野球移民ではない人々）を取り上げ、移住先でのペロータの意味を考察する。著者はまず、多くの移民は経済的に余裕がなく、本国の人々の期待とは裏腹にドミニカンヨルクとして故郷に錦を飾ることが困難であることを確認する。そしてドミニカ人移民の間で開催されるアマチュアのソフトボール・リーグに着目し、容易に帰郷できない移民にとって手軽なペロータとしてのソフトボールこそが、故郷を懐かしむ手段であると指摘する。こうして移民の間で、ドミニカ本国のペロータ文化が継承されていると主張する。

結論では、著者はこれまでの議論を振り返り、野球ビジネスを通じた世界経済との関わり、ドミニカの地域社会の規範意識、そして個人々のさまざまな動機づけが一体となり、野球移民を誕生させていると述べる。またこうした見解は、国際移民研究とスポーツの人類学的研究に、新たな視点をもたらすものであることを強調する。

本論文の学術的成果として次の 3 点を指摘したい。第 1 に、ドミニカとアメリカ合衆国双方をフィールドとし、ドミニカでは 80 世帯を対象とする聞き取り調査を行うなど、豊富な民族誌的データを駆使して考察を進めている点である。その結果本論文は、ドミニカ移民が形成するトランスナショナルな社会に関する出色の「マルチサイト民族誌 (multi-sited ethnography)」となっている。第 2 に、クーニャやドミニカンヨルクなどドミニカの人々に特有の社会関係を表す概念の析出に成功しただけでなく、野球に対するさまざまな思いを明らかにし、ドミニカのペロータ文化を明瞭に提示したことである。これはドミニカに関する文化人類学や、スポーツの人類学に対する新たな貢献として評価できよう。そして第 3 に、アメリカ合衆国に暮らすドミニカ移民の間では本国の文化的影響力が強く、破格の報酬を手にした MLB 選手もまたその例外ではないことを立証した点である。これは移民の文化変容を自明視する一部の国際移民研究の見解を相対化する知見として価値がある。

一方、本論文には課題も残されている。例えば、本論文の論考は基本的にドミニカの単一集落の住民、およびそこからの移住者に関するデータに依拠しており、ペロータ文化の地域差は検討されていない。またペロータ文化を論じるにあたっては、ドミニカ国内のプロ野球リーグに関する考察を付加することで、より厚みのある記述になったと思われる。さらにドミニカ女性にとってペロータとは何かを問うジェンダーの視点も、ペロータ文化の一側面として検討されるべきだったであろう。しかしこれらの点は、本論文の欠陥というよりは、今後の課題とみなすべきものである。著者には、本論文を土台にこれらの課題に挑戦することが求められる。

以上を総合的に評価して、本審査委員会は全員一致で本論文が博士の学位を授与するにふさわしい論文であると判断した。